異文化交流実践を授業へフィードバック

松浦まち子・浮葉正親・田中京子

. 基礎セミナー A (前期開講)「多文化社会を 生きる」

1.授業のねらい

外国文化を持って日本で暮らす人々に焦点をあて,彼らの視点を通した日本を知ることによって,日本社会の課題に気づき,様々な文化を持つ人々が共に生きることについて考えた。

2. 受講者及び講師

開講2年目の授業で、受講生は12名(内訳:文学部2名,教育1名,法学部2名,経済学部1名,情報文化学部1名,理学部2名,工学部1名,農学部2名), TAは国際言語文化研究科のElitsa Marinova(ブルガリア出身留学生)だった。ゲストスピーカーとして稲垣達也・アイダご夫妻(5/13),姜信和氏、原田芳裕氏、岩田梓氏(以上5/20),張玉玲氏(5/27),岩村ウイリアン雅浩氏(6/10)に参加してもらった。平成16(2004)年度は、三宅政子、浮葉正親、田中京子、松浦まち子(責任者)の4名が担当した。

3.授業内容等

- 3 1 スケジュール
 - 4 / 8 オリエンテーション,自己紹介,プレゼン テーション実演
 - 4/15 自分と異なる文化を持つ隣人について
 - 4 / 22 TA の出身国「ブルガリア」を学ぶ
 - 5 / 6 効果的なプレゼンテーション, Power Point とは何か?
 - 5 / 13 国際結婚した人たちの暮らしを詳しく知ろ う(ゲストスピーカー)
 - 5 / 20 在日韓国人の人たちの暮らしを詳しく知ろ う(ゲストスピーカー)
 - 5 / 27 在日華僑の人たちの暮らしを詳しく知ろう (ゲストスピーカー)
 - 6 / 10 在日ブラジル人の人たちの暮らしを詳しく 知ろう (ゲストスピーカー)

- 6 / 17 発表準備 (Power Point 作成)
- 6 / 24 レポートを書く時の留意点と文献検索方 法,発表準備
- 7/1 発表と討論
- 7/8 発表と討論
- 7/10 発表と討論
- 7 / 15 発表と討論
- 7/22 まとめ
- 3 2 口頭発表テーマ
 - ・世界の競馬
 - ・韓国での日本文化の開放
 - ・ドイツシュタイナー教育
 - ・社会主義国の政治
 - ・見えない文化の違い
 - ・ネイティブアメリカン
 - ・外国人が見た日本(日本人)
 - ・JAZZ の多文化性
 - ・移民を考える~オーストラリア編
 - ・ドイツの音楽文化
 - ・日泰寺とタイ
 - ・世界のマナー

3 - 3 レポート集

日本人学生は口頭発表より自分の意見を文章にする ほうが得意と感じる。レポートはどれもよくできてい た。担当教員全員が学生一人一人にコメントを書き , それをまとめてレポート返却時に各学生に渡した。受 講生が12名と少数であるからこそできるきめ細かい指 導である。さらに昨年度同様「レポート集」を作成し て配布した。

4 . 評価

このゼミでは、ゲストスピーカーを4回延べ7名招き,それぞれの立場から話をしてもらい,その後全体で意見交換した。テーマは 国際結婚, 在日韓国人やその血筋の人々の暮らし, 在日華僑の人々の暮らし, 在日ブラジル人の暮らしの4つである。毎回学生に感想を書かせる宿題を与えたが,とりわけ在日韓

国人のあり方については大きな反響があった。ゲストスピーカーが熱意を込めてありのままの気持ちをさらけ出してくださったことが学生に伝わったものだが、学生の純粋な受け止め方に感動した。わずか数ヶ月のことで、学生の視野が広がっていく様子に教育効果のすばらしさを実感した。また、TA は留学生を採用し、日本人学生が地域の多文化の一端を担う留学生の存在を身近に感じるよう配慮した。

来年度への反省点は、学生のテーマ決定に制限を設けなかったため、地域の多文化という視点が抜けて、異文化であればなんでもありのようなテーマが見られたことで、そのため来年度はゲストスピーカーの話に基づくテーマ設定を指導予定である。また、わずか12名の受講生でありながら、いつも、学生とゲストスピーカー、学生と教員という1対1の関係性が多く、学生同士の親密化が思うほど進まないため、クラスの雰囲気の緩和策として来年度はグループ発表を導入することを考えている。

【参考】学生からのコメント (アンケート自由記載欄より)

この授業は毎回考えさせられることばかりですごく勉強になりました。多文化共生社会というのは,私にとってもすごく興味のある分野で,本当に難しい問題ですが,この基礎セミナーを通して,そうしたことについてじっくり考えることができました。ありがとうございました。

異文化について直接いろいろな話(体験談など)が聞けたし,みんなのいろいろな意見が聞けて,自分の視野を広げることができてよかったです。

在日韓国人の方や在日中国人の方など様々な方のゲスト講演が百聞は一見に如かずで、とても現実味を持って聴けてよい勉強になった。ただ教材だけで学ぶよりも深く印象に残り、問題意識の根付きとなった。TAの方のサポートも微に入り細に入り大変よくサポートして頂いた。プレゼンでは、自分の社会に対する関心、興味を改めて確認できたと同時に他の学生の関心もよく理解できて面白かった。特にあらゆる学部から学生が来ていたので興味深かった。

毎週毎週違う刺激があってとても楽しい授業でした。 た。

基セミの授業は私が前期にとった授業の中で一番 面白かったです。アットホームな感じがとても心地 よかったです。充実した授業だったと思います。

. 教養科目「留学生と日本 異文化を通して の日本理解 」浮葉 正親

1.授業のねらい

外国人留学生と日本人学生が討論や協同作業を通じて,両者の日本に対する理解と相互の理解を深めることを目的とする。名古屋大学内およびこの地域で異なる文化を持つ人々が共に学び生きることの意味を考え直し,多文化共生のあり方を模索する。

2.受講者

学部生は29名(日本人学生28,学部留学生1)。受講生の学部別内訳は,文学部3,教育学部3,法学部6,経済学部3,理学部1,工学部6,農学部4,医学部3である。学部留学生の国籍は中国である。これに10月に渡日した日本語・日本文化研修生21名(中国4,インド3,ベトナム2,ウクライナ2,ポーランド2,韓国1,タイ1,インドネシア1,イタリア1,ウズベキスタン1,ブルガリア1,ルーマニア1,ブラジル1),日韓共同理工系留学生3名を加え,日本人学生28/留学生25,計53名で授業を行った。

平成16(2004)年度は,浮葉正親,田中京子,松浦まち子,堀江未来の4名がこの科目を担当した。全14回の授業内容と担当は以下のとおりである。

3.授業内容

3-1 スケジュール及び担当者

10/4 オリエンテーション(1)(全員)

10/18 オリエンテーション(2)(全員)

10/25 異文化との出逢い(田中)

11/1 在日留学生と日本社会(松浦)

11/8 異文化コミュニケーション(堀江)

11/15 グループ活動について(浮葉)

11/22 グループ発表準備(全員)

11 / 29 グループ発表準備(全員)

12 / 6 グループ発表と討論(全員)

12/13 グループ発表と討論(全員)

12/20 グループ発表と討論(全員)

1 / 17 ケースから学ぶ異文化(田中)

1/24 留学体験について考える(堀江)

1/31 まとめ(全員)

3 - 2 グループ発表のテーマ

グループ1:日本人とお化け

グループ2:日本の結婚事情 非婚・晩婚化と言わ

れているが

グループ3:なぜ日本人は英語を話せないか?

グループ4:日本の結婚式事情について タン&ア

ンナの結婚式編

グループ5:日本語のあいまいな表現について

グループ6:男女の言葉はなぜ違う? グループ7:レディーファーストと日本

クループ/:レティーファーストとロ

グループ8:バイトについて

4.評価

昨年に引き続き,グループ活動に対する評価を重視し,全体の40%(発表30% + 自己評価10%)とした。その他は,レポートが30%,出席10%,クラス討論への参加度10%,宿題提出10%である。グループ発表に対する評価は,五つの評価項目を作り,4名の教員による評価を15%、他の学生による評価を15%とした。結果的には,どのグループも積極的に発表に取り組み,24~27%を獲得した。発表のなかには演劇を用いたグループが3つあり,インタビューやアンケートによる調査の結果をパワーポイントにまとめたグループも多く,全体に工夫が感じられた。

ただし,グループ活動に対するアンケートには次のような感想も書かれていた。「留学生の疑問に答える他の日本人学生が固定観念の固まりで,誤解を招かないようフォローしなければならなかった。また,細部にこだわって全体が見えない,あまり話し合いに参加しない,いつまでたっても『結局どうしよう』しか言わないなど,私自身はグループに対してかなり不満を持った」。教員の目の届かないところで,学生たちは慣れないグループ活動に葛藤を感じていたのだろう。

17年度は、グループ発表終了の2週間後、グループ活動での体験を話し合った。留学生からは、「話し合いの中で分からない言葉があっても、話の流れを止めてしまうので聞きにくい」とか、「知っている単語の意味を何度も確認されて嫌だった」という感想が出される一方、日本人学生からは「留学生の日本語の間違いをどの程度直していいのか分からない」という感想が出された。また、グループ全体のまとまりを重視したグループと発表の内容の精度を重視したグループがあったことも分かった。その授業の感想には、「今回

のフィードバックで自分と似ていることを感じた人, 逆に気づかなかったことに気づいた人がいる,という ことが分かってよかったです」とあり,不満や疑問に 感じていたことを相対化するよい機会となったようで ある。そして,グループ内のコミュニケーションのあ り方を異文化間コミュニケーションの理論から捉え直 す講義を行い,状況をよく観察することの大切さ,他 者を評価することの難しさ,危うさ等を確認した。次 年度もグループ活動のフィードバックを必ず実施した い。

. 大学院授業「異文化接触とコミュニケーション」: 国際言語文化研究科 日本言語文化専攻応用言語学講座(担当:田中京子)

2003年度に開講した科目を,2004年度も継続した。

1.授業のねらい

母語や背景となる文化が異なる人たちが, 意思疎通をはかりながら共に生活しようとする時, どんな創造や衝突があるか, 文献購読や経験学習, 討論を通して考え学ぶ。

コースの中では,共通言語として英語を使用して話し合いや実習を行うことによって,言語能力が様々な人たちの間のコミュニケーションの特徴を実体験し,積極的で公平なコミュニケーションについて考察する。

2 . 受講者

国際言語文化研究科日本言語文化専攻・多元文化専攻の大学院生12名,他研究科の大学院生,研究生など含めて,16名が受講した。学生の出身国は6カ国,地域は東アジア,南アジア,アメリカ,ヨーロッパに渡っていた。

3 . TA

今年度は TA 予算がつき, 教員と TA の二人三脚で授業の内容を深め, 学生に還元していくことができた。

前期:教育発達学研究科 博士後期課程 中島葉子 後期:教育発達学研究科 博士後期課程 ラセガー ド・ジェームス TA は異文化コミュニケーションを専攻しており, レポートへのコメント,参考文献の紹介,授業への参加,発表などを行なった。

4.授業内容

経験学習(疑似体験学習,ロールプレイ等) 事例考察

討論

文献購読(宿題) 文献についてのレポート(宿題) 発表(事例作成,討論進行)

5.評価

教員はこれまで行ってきた国際交流関連業務や留学生相談の中で培った異文化コミュニケーションに関する経験や知識を,個別教育(相談)だけでなく授業の中でも生かすべく積極的にとり組んだ。また,この授業を逆に個別教育に還元して相談活動を発展させることも意識した。留学生センターでの活動の独自性を活かし,大学院教育に貢献できたと思う。

参加者にとって、母語であったり、第2、第3の言語であったりする英語を使用することは、英語運用能力の初中級者から母語話者までが混在するグループでいかに共通理解をはかるかを考える実践の場となり、結果よりも過程そのものに重点を置いた授業となった。専攻や年齢、国籍、言語運用能力の異なる参加者全体の間に生まれるコミュニケーションはダイナミックで、時には緊張したものとなった。

前期に毎回宿題として出した文献購読とレポート提出にほぼ全員が真剣に取り組んだ。各授業の後に TAと教員がレポートについて検討会を持ち,コメントを書いてレポートを返却した。後期は一人1時間使って事例を発表し,その解釈についてグループ討論し,更に宿題として参加者が自分の意見や解釈を書いて発表者と教員に提出するという形をとった。ひとつの事例

について全員が話し合い,更に,内省してそれをまとめ,伝えるという作業を通して,学習内容が深まった。しかし全員討論の場では自然,英語の運用能力の高い参加者が多く発言するという状況が起こりがちで,その場合全体の意見もそちらへ傾く,という傾向が感じられた。

コース後の学生による評価では、異文化についての学びが多かったという面以外に、言語力による影響力の差についても触れられていた。「自分がクラスをハイジャックしていなければよいのだが…」「言語能力が低い人ももっと積極的に発言してほしかった」(英語母語話者)、「自分がこれほど寡黙なこともあるとは思わなかった」(英語中級者)。また、「たまたま参加者に恵まれていたので多く学ぶことができたが、参加者の質によってはこうはいかないと思う」と、討論の難しさを実感したという意見もあった。しかしコースの内容を消化しきれずに終わった学生が数名いたかもしれない。彼らからは評価を提出してもらうことができなかった。

今年度もセクシュアルハラスメント相談所に1コマ 研修をお願いした。ジェンダーの問題を扱う内容は, コース内容に深く関連するものであったが, 苦情処理 方法,相談所の説明はコースの目的と異なっており, 今後工夫の必要がある。授業後すぐにその旨の意見を 伝えてくれた学生もあった。前期 TA に,「外国籍の子どもたちの教育」について, 1コマ使って発表して もらった。身近な地域の例を具体的に知り考えるよい 機会となった。

このコースで発表した事例と討論した内容を土台に、"Different Cultures, Different Interpretations"の本の編纂を行なうことになった。幸いこの活動のためにJAFSA(日本国際教育交流協議会)の研究・調査補助金が支給されることになり、2005年度前期の完成をめざして有志で研究会を継続し、本の編集を進めている。